

# ゆっくりとおやすみになって下さい —うさぎとかめの話—

青木稔弥

## (一)

大阪朝日新聞大正八年一月一日号に『新しい十二支<sup>(1)</sup>』という「ゑばなし」がある。「コドモ号」の面に、鈴木三重吉『踊りの焚火』という「オトギバナシ」とともに掲載されたものである。

大正八ねんのお正月の元日、お日さまが、はれやかな、ニコニコ笑ひをお見せになるのとしよに、天王寺の動物園の鳥やけだものたち一同は、年をとこ役の羊を先に立てて王さまのライオンのところへ、おめでたうを申しにまゐりました。

さて御ねんしもすみ、これからめいめいの芸づくしかはじまらうといふとき、年をとこの羊をはじめ、犬、さる、とら、へび、馬、牛、うさぎ、ゐのしゝ、にはとり、ねずみなど十二支にえらばれたものたちはずらりと王さまのライオンの前へならびまして、口上やくの羊からこんなことを申し出ました。

「私たちは、むかし昔の大むかしから、まい年かはる代る何百たびとなく年をとこの役目をつとめてまゐりましたので、だれもめづらしがつてくれません。そこで王さまはじめ皆さん方のおそろひなのをさいはひ、私たちの代りになる新しい十二支をえらばせては下さいませぬか」

王さまのライオンは、十二支のものたちのことばをすぐにさんせいしました。

「では、まづねずみから代つてもらひたいと思ふものをいつて見たがいゝ」

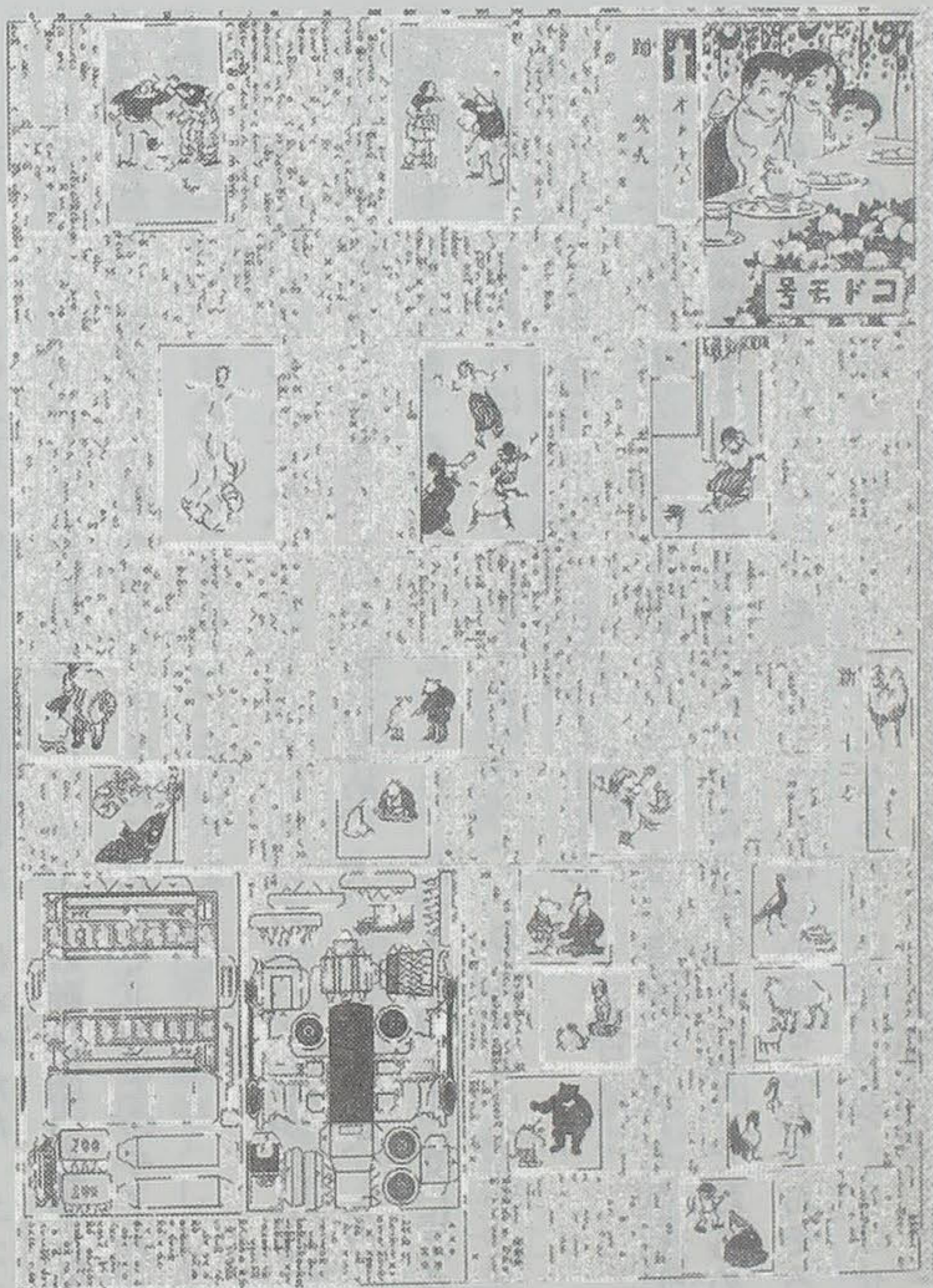
とおつしやりました。

この王さまのライオンの許可を得て、十二支の動物たちが、それぞれ自分の代役を選んでいく物語は、大阪朝日新聞のみの掲載で、東京朝日新聞にはない。夏目漱石等の著名作家の小説ならば、東京朝日新聞と大阪朝日新聞の双方に、数日のずれはあっても、ほぼ同時に掲載されるのが通例なのだが、国内三番目の動物園として大正四年一月に開園した天王寺動物園を舞台にしているので、ローカルな物語という位置づけがなされているということであろうか。

ねずみは、チウチウとよろこび鳴きをしながら、黒いかあい、目でそこら中を見まはして居りましたが、

「私たちのなかまは、ねこさんにはいつも、いぢめられつゞけて居ります。で、このおめでたい新年としよに、仲なほりしていただくかと存じます。そのしるしとして、次の年の私のやくめはねこさんの方へお引きわたしたいと思ひますが、ねこさんいかにせう」





するとねこは、くびについてゐる金のすゝをチャラチャラならして

「おたがひに仲よくしませうね。……君の代りはしますけれどもペストまでお引きうけするのはこまりますね」

と、じやうだんをいひながら、ねずみの手をにぎりました。

つぎには牛がまをしました。

「年をとこの役も、モウ／＼あきあきした。僕は象君に代つてもらひたいんですがね。僕が天神さまをのせ、君は仏さまをのつけるのが役だから、まア似たりよつたりでせう」

とこんなことをいって、のそのそと自分の小やへかへつて行き

ました。

「ゾウもありがたう」

象はしやれをいって、なかいはなて地めんを三べんたゝきました。

三ばんめの、とらは、ドラごゑをはりあげ、くびをふりふり申しました。

「私の代りといつては、王さまのほかはありません」

王さまのライオンは、さもうれしさうに、かほ一ぱいの笑ひを見せながら

「よろしい」

と、おそろしい大ごゑでうけ合ひました。そして立あがると、ヒユウドンドンと口べうして、獅子まひををどりました。

四ばんめにはうさぎが、なかいみゝをひよこ／＼させて、

「もしもしかめよ亀さんよ、君とマラソンきよう走をして負けてからといふものは、ろく／＼眠ることさへ出来ないでこまつてゐます。一つむかしなじみに僕の役を引うけてくれ玉へ」

と申しますと、亀は

「よろしうございます。どうぞ、ゆつくりとおやすみになつて下さい」

鼠は猫に、牛は象に、虎はライオン、即ち、獅子に、兎は亀にと、次々と交代する動物が決まる。本稿の主たる考察対象は、末尾に「ゆつくりとおやすみになつて下さい」とある四番目の兎と亀の話であるが、後続部分にも興味深い話があるので、引き続き、紹介しておくことにする。



五ばんめのたつは、天の上からでんわをかけるやうにいひました。

「もしもし、そこにさかなの鯉くんは見えませんか、僕の代りは鯉くんにおたのみしたいんですがね。なぜって、五月にはいつものぼりになつて僕と一しよに天でおよいでゐるので、むかしからの仲よしなんですよ」

そこで、王さまは、すぐに、うしろのお池の中にある鯉のところにでんわをかけました。

六ばんめにはへびが、ペロペロと舌を出して、いひました。

「私はきじさんにおたのみします。私よりつよいものは、まだ外になめくじさんがありますが、なめくじの年つてのものをかしいので、雉子さんにたのむことにいたしました」

きじは、高い羽ばたきをさせて二度も三どもよろこびなきをしました。

七ばんの馬は、おとなりにすわつてゐる鹿に

「君とはいゝにつけ、わるいにつけ、きつと一しよによばれる。

僕のあとを引うけるのは君より外にないよ」

といひますと、鹿は笑ひながら

「代つてもかはりばえはしないが引うけようかね」

とうなづいて見せました。

八ばんめは羊でありました。

「今年はまだ、きまつてをりますから、今から、きふに取りかへることも出来ますまいが、十二ねんめの私の役めは、駱駝さんにおたのみするつもりでをります」

「しかし、あひかはらず、服になつたり、シャツになつたりして、おつきあひはしませうね」

と駱駝はいひました。

九ばんめのさるは

「僕は人間を頼んでやりたいと思ふのだが、とても、せうちしてくれまいし、桃太郎さんのお供仲間へびくんにつれて行かれたし、……さアだれにしやうかな」

とそこらを見まはしながら、

「おゝ、かにさんが居た。仲間ほりをして、一つあとのところを頼みますぜ」

かには

「たしかに引うけました」

と泡ぶくをふきながらいひました。

十ばんめのはとりは、

「私のあとにはくじやくさんか、つるさんか、どちらかにおゆづり申します」

といひますと、

「孔雀のとしつていふのも妙ですね。これはつる君のものでせう」と孔雀はじたいしましたので、とうとう鶴が代ることになりました。

五番目から十番目にかけての部分引用した。龍は鯉に、蛇は雉子に、馬は鹿に、羊は駱駝に、猿は蟹に、鶏は鶴に交代する。「なめくじの年つてのものをかしい」や「孔雀のとしつていふのも妙ですね」との発言が象徴しているように、ここまでの分は「代つてもかはりばえ



はしない」穏当なものになっているといえるだろう。

十一ばんめの犬は少しかつかりした顔つきで、

「仲間のきじ君はへび君に取られてしまったし、桃太郎さんはな  
ぜもつとたく山のけらいをつれて行かなかったのだらうなア」

とこぼして居りますと、

「それなら僕が代りませう」

とくまが、みんなを押しわけて出て来ました。

「むかしの人は犬わか丸だのくま若丸だのつて名をつけたさうで  
すから、まんざら他人でもありませんね」

と犬は引こんで行きました。

十二ばんめののし、は、

「しんるゐのぶたさんと思つたが、あのとほりの、ぶせうもの  
なので、年男などはまつびらだといひますので、獺さんにおねが  
ひしやうとおもつてゐます。もつとも、あの方はたゞ今こちらに  
はお見えになりませぬが、まだ私の年までは五ねんほどあります  
から、それ迄には、きつとお見えになることゝ存じますので、さ  
うきめておきます」

と申しました。

そこで来年からは猫、象、獅子、亀、鯉、鹿、駱駝、雉子、蟹、  
鶴、熊、獺が新しい十二支になることになりました。

次行に「(おしまひ)」とあり、これで全文の紹介を終えたことにな  
る。十一番目の猿から熊への交代については、桃太郎、猿蟹合戦への  
言及からして妥当な線に収まっているといえようが、最後の「獺さん  
におねがひ」は少々驚きである。縁起の良い初夢を見るために悪夢を

食う想像上の獣である獺の画を枕の下に入れて寝る風習が一部にある  
ようで、とすれば、本稿のタイトル「ゆつくりとおやすみになつて下  
さい」にピッタリだが、ここでは、むしろ生きたバクが初めて日本に  
やってきたのが明治三十六年の事で、その地が第五回勧業博覧会が催  
された大阪であつたことに注目しておきたい。

「明治三十三年五月十五日勅令第百七十六号ヲ以テ第五回内国勧業  
博覧会ヲ明治三十六年三月一日ヨリ同年七月三十一日迄 本市南区天  
王寺今宮ニ開設」し、「盛大円満ナル好果ヲ収メテ閉会」(大阪市役所  
商工課『第五回内国勧業博覧会報告書』明三七・五・二三)しており、第五  
回内国勧業博覧会協賛会は「場外余興ノ主ナルモノ」として「動物園」  
を「多年南洋諸島ニ往来セル沢田糸蔵并ニ山岡千太郎両氏ノ発企ニ」  
より「博覧会売店ノ西手ニ開設」し「牝牡ノ獅ヲ始メ象虎豹黒豹星虎  
水牛牝牡ノ獺」等の「南洋地方ニ於テ採集シタル珍禽奇獣数十種ヲ収  
容シ」(『第五回内国勧業博覧会協賛会報告書』明三六・一一・二〇)てい  
た。<sup>(2)</sup>

天王寺動物園は第五回内国勧業博覧会場の跡地に開園しているの  
である。ローカルな視点からの「獺さんにおねがひ」があるというべき  
かもしれない。

## (二)

さて、ここからが本題である。

兎と亀の話の源泉はイソップ物語にある。近世以前の紹介はなく、  
渡部温『通俗伊蘇普物語』卷之一<sup>(3)</sup>所収の「第二十七 兎と亀の話」が  
最も早い部類ということになる。



兎。亀の行歩の遅きを笑ひ。愚弄して「コウ。こゝへ来や。競争をしやう。乃公の足は何で出来てと思ふゾ」と威張れば。亀は迷惑には思へども一ツ処へおし並び。サアと云れて寸分も猶予せず。例の通り遅々とあるき出す。されど兎は固亀を侮て居る事なれば。一向に遽もせず。うさぎ「吾はマア一睡して往くから。急で往なせへ。直に追越すよ」と云て微睡とする内に。亀の影が見なくなつた故。兎肝を消し。急に躍出して約束のところへ至て見れば。亀は先刻到着して。欠伸をして居たりけると

遅緩なりとも弛ざるものは。急にして怠るものに勝つ

ただし、「うさぎ」が「もしもしかめよ亀さんよ、君とマラソンきよう走をして負けてから」不眠症で困っていると述べていることに注目すれば、石原和三郎作詞、納所弁次郎作曲の唱歌「うさぎとかめ」こそが直接の典拠であつたことになる。

「もしもし、かめよ、かめさんよ、せかいのうちに、おまえほど、あゆみの、のろい、ものはない、どうして、そんなに、のろいのか。」

「なんと、おっしゃる、うさぎさん、そんなら、おまえと、かけくらべ、むこうの小山の、ふもとまで、どちらが、さきに、かけつくか。」

「どんなにかめが、いそいでも、

どうせ、ばんまで、かかるだろ、  
こころで、ちょっと、一ねむり、  
グー／＼／＼／＼、グー／＼／＼。

「これはねすぎた、しくじった、  
ピョン／＼／＼／＼、ピョン／＼／＼。

「あんまりおそい、うさぎさん、  
さっきのじまんは、どうしたの。」

この唱歌「うさぎとかめ」は、当時も知名度は高く、例えば、夏目漱石の『吾輩は猫である』の第二回に子供が奥座敷で「何と仰しやる兎さん」を歌っている場面がある。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に膠着して居る。白状するが餅といふ者は今迄一返も口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、又少しは氣味がわるくもある。前足で上にかゝつて居る菜つ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引き掛つてねば／＼する。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時のよな香がする。食はうかな、やめ様かな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。御三は暮も春も同じ様な顔をして羽根をついて居る。小供は奥座敷で「何と仰しやる兎さん」を歌つて居る。食ふとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年迄は餅といふもの、味を知らずに暮して仕舞はねばならぬ。

イソップ物語を題材にした唱歌は、丹羽後之助撰『イソップ唱歌』(初山書店 明四四・二・一〇)を除けば、ほとんどないのだが、実は、うさぎとかめを題材にした唱歌は、もう一つ存在する。



(一) 亀と兎と、ある時に 走りくらべをしたりしが、

兎は亀に語るよ、その足おそが、いかなれば、

我にかたんと、悔りて、恥ぢしめしこそおろかなれ。

(二) 足こそ亀は遅けれど、たゆむひまなく行きしかば、

早くも先につきにけり、兎は、あまりの慢心に、

一<sup>ひとこひ</sup>跳とびては休みつゝ、おこた<sup>あしおそ</sup>りがちに進みゆく。

(三) 到りて見れば、こはいかに、かの足遅とあなどりし

亀は、とくより行きつきて、巖<sup>いはほ</sup>のうへにまちゐたり、

兎はこゝに心折れ、油断せし身を悔いしとぞ。

教育音楽講習会『新編 教育唱歌集』第一集所収の唱歌「亀と兎」である。「亀と兎」は、全くといってよいほど知られていない唱歌だが、

「うさぎとかめ」に続いて複数回、唱歌になるというのは、うさぎと

かめの話そのものの知名度の高さを証明している。当然のことながら、

教科書類にも数多く採用されており、おそらくは、原亮策編述『小学

読本巻四 初等科』（金港堂 明一六・九）第一課「亀とうさぎ」

あゆむこと。おそしといへども。怠らず。ゆくときは。つひに千

里の遠きにも。いたるべし。むかし兎と亀とありて。はしること

をば。たくらべりしが。兎は。己が足のはやきにほこり。亀の歩

みのおそきを悔りて。途中に。ひとねふりし。やがて目をさまし

てみれば。亀は。はや定めたる処につきて。勝ちをとりしとぞ。<sup>(8)</sup>

が最も早く、坪内雄蔵『国語読本 尋常小学校用』（合資会社富山房 明

三三・九・一七 明三三・一二・一九訂正再版）は、最小限の文字使用で

表現することをしている（下の図版参照）。

『尋常小学読本』（文部省編輯局 明二〇・五）巻之五第四課「狐と蟹



とのかけくらべ」、学海指針社編『帝国読本 初等科』（集英堂 明二五・九・二〇）巻之二第二十一課「ウサギ ト カニ」のような変形版も注目すべきものだろう。前者を抄出しておく。

或る時、一疋の蟹、小川よりはひ上りて、堤の上を歩み居たり。

狐、これを見て、嘲りながら云ひけるは、「蟹よ、汝の歩み方は、

進むのか、退くのか、其様子にては、此堤へ来るまでに、一二三ヶ

月もかゝりしならん。

蟹は、之に答ふる様、「汝は、未だわが速に進み得ることを知ら

ざるか。しらずば、汝とかけくらべせん、（\*中略）

狐は、早速之を承知し、太き尾を下げて、蟹のあひづを待ち居

たり。蟹は、しづかに、後にまはりて、狐の心付かざるやうに、

尾の先きをしかとはさみて、「いざ進め」と云ひしかば、狐は、



一所懸命に走りて、忽ち定め場所に達し、直にむきかはりて、今来し方をながめ、蟹の、未だ見えざるにより、其遅きを嘲りたり。蟹は、其後より、「狐よ、汝は、何を云ふぞ、われは、汝より先きにつきて、こゝに汝を待ち居るなり」と云ひければ、狐は、おどろき、後を見返り、「成る程、汝は先きに居るか」と、尾を垂れて逃げ去りたり。<sup>(9)</sup>

後者は、兎の方から「おゝ、かにさん、なんとむかうの 山まで、かけくらをしようではないか」と提案するという違いはあるが、「兎ノウシロヘ マハリ、ハサミデ、ソノヲニ、ハサミ ツキマシタ」<sup>(10)</sup>のは同じである。

カメがカニになることはともかくとして、狐が登場することに違和感を覚える人がいるかもしれないが、同時代的な視点でみれば、存外、普通のことである。

大正元年十月一日発行の雑誌「英語少年」第二巻第十号に「イソツプ芝居」があり、近頃「米国で」「盛に行はれて」いる、「読本の稽古に物語の筋を芝居に仕組んだ対話」を紹介し、その一例として、「筋は諸君の最も熟知せる彼の兎と亀が競争をする話をとりました。此芝居には狐が審判になつて登場して居ます。学校の文芸会などで斯う云ふ英語芝居を演ずるのは中々に有益で又趣味の深いものであります。是非諸君の試演を御勧めします。」と述べている。「狐が審判になつて登場」することの面白さを理解するためには、「兎と亀が競争をする話」が「熟知」されていることが必要不可欠であることは贅言するまでもないが、狐の登場そのものは「イソツプ芝居」独自の趣向ではない。明治年間に日本に入つて来ている英訳イソツプ物語には「狐が審

判になつて登場」する版が存在しているのである。

明治四十三年十月一日から翌年四月一五日にかけて、雑誌「英語青年」に「伊蘇普物語比較研究」<sup>(12)</sup>の連載がある。連載開始時に

英訳になつた伊蘇普物語は随分沢山ある。が目下日本で英語教科書として広く用ゐられて居るのはRev. C. Stickneyの英訳のやうであるから之を土台として訳註を施し、之にRev. George Fyler Townsendの英訳、J. Walker MeSpaddenの英訳、Thomas Bewickの英訳、Joseph Jacobsの改作等を参照して作文会話の注意となるべき点を述べ、之に副ふるにone syllableの語のみにて綴つた文章を掲ぐることをする。

とあり、StickneyとTownsendの英訳には「狐が審判になつて登場」する。ただし、Townsendを原典とする田中達三郎『寓意勸懲 伊蘇普物語』(木村多喜刊 明二・四・四)<sup>(13)</sup>には、Thomas James訳を原典とする『通俗伊蘇普物語』を意識したためか、狐は登場しないので、日本語訳の中に狐が審判になつて登場するのは、英語教科書でステイックニー版が主流となり、その日本語対訳が必要になつてからのことである。例えば、石原益治『イソツプ物語講義』(大三・一・二一)は「五弗の賭でお前さんと五哩競争しやう、そして向ふに居る狐を審判官にしやう」と訳している。<sup>(14)</sup>なお、『寓意勸懲 伊蘇普物語』の有斐閣書房刊、明治二十九年九月二日訂正八版印刷出版の表紙には、先行する亀と煙草をふかしながら一服している兎が描かれている。うさぎとかめの話をイソツプ物語の代表のように考える人がいたということだろう。



(結び)

『新しい十二支』には、あえて関係づけられれば、他にも、イソップ物語に関連の話がある。最初の鼠が猫と交代する話は、「衆鼠商議の話」(『通俗伊蘇普物語』巻之二第七十七)に結びつけてよいものだろう。「忠太郎」「尾長引之助」「老鼠忠左エ門」が登場し、「俗耳に入り易き」ように日本的に「脚色」した「鼠の会議」(島田軍吉『我樂多集』明三九・二・一三)<sup>(15)</sup>のような例もあるが、ここではオーソドックスに『伊曾保物語』万治二年刊整版本から引用しておく。下巻第十七の「ねずみども、だんかうの事」(『仮名草子集成』第三巻 昭五七・四・三〇)である。

或時、鼠。老若男女。相集、せんぎしけるは。いつも、猫と云徒者に、亡さるゝ時。千度くやめ共、其益なし。彼猫、声を立て、然らずは。足音たかく、などせば。かねて、用心すべけれ共。ひそかに、近付程に。ゆだんして、とらるゝのみ也。いかゞせん、と、云ければ。

古老の鼠、すゝみ出申けるは。詮ずる処、猫の首に。鈴を付て置侍らば。易知なん、と、云。皆々、尤、と同心す。然らば、此内より、誰出てか。猫の首に、鈴を付給はんや、と、云に。上臈鼠より下鼠に至迄。我付ん、と云物なし。是に依て、其度のきでう。事をはらで、たいさんしぬ。

『新しい十二支』の「ねこは、くびについてゐる金のすゝをチャラチャラならして」いるわけだから、何らかの方法で鼠の計略は成功しているということである。猫の首に鈴をつけることができた大正時代も半

ばとなれば、うさぎが亀に「年をとこの役目」を譲り、「どうぞ、ゆつくりとおやすみになつて下さい」とのねぎらいの言葉を受けるにいたっても、何の不思議もない。

注

(1) 引用に際しては、適宜、句読点を補い、誤植を正した。  
(2) 第五回内国勸業博覧会協賛会編纂『大阪と博覧会』(明三五・一二・二六)には「▲大動物園 南洋に棲息する特種奇異の動物を置き、又珍奇なる植物をも構内に栽ゆるの趣向にて、普通の動物園には見得られざるものなり」とある。

(3) 「当時の新聞広告によれば、明治六年(一八七三)四月と同年暮の二回に分けて、三冊ずつ刊行されたもの」(谷川恵一「解説」東洋文庫693『通俗伊蘇普物語』平凡社 二〇〇一・九・一〇)。

(4) 引用は堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』(岩波文庫)による。初出は『幼年唱歌』二の上(明三四・七)とある。

(5) 『イソップ唱歌』は「影」「握飯」「斧の柄」「重荷」「金の卵」の五編を収め、冒頭に「影」の楽譜と末尾に「イソップ唱歌訓解」を付している(明治四十四年四月十五日発行の再版による)。「通俗伊蘇普物語」でのタイトルにより内容を示せば、「影」は「犬と牛肉の話」、「握飯」は「盗賊と飼犬の話」、「斧の柄」は「樹と斧の話」、「重荷」は「馬と荷を負った驢馬の話」、「金の卵」は「鷺黄金の卵を産む話」である。

(6) 単行本『吾輩は猫である』(大倉書店・服部書店 明三八・一〇・六)による。初出は「ほととぎす」第八巻第五号(明三八・二・



一。

- (7) 『日本教科書大系 近代編 第二十五卷 唱歌』(講談社 昭四〇・九・一五) 所収の東京開成館発行、明治三十九年一月二八日訂正六版による。明治二十九年一月十日初版の時点では、唱歌「亀と兎」の掲載はない。

- (8) 『日本教科書大系 近代編 第七巻 国語(四)』(講談社 昭三八・一一・一〇) による。

- (9) 古田東朔編『小学読本便覧』第二巻(武蔵野書院 昭五三・七・三二) 所収。

- (10) 『日本教科書大系 近代編 第五巻 国語(二)』(講談社 昭三九・三・一〇) 所収の明治二十六年九月四日の訂正再版による。

- (11) イソップ物語に「蟹<sup>こかに</sup>と蟹母<sup>はかに</sup>の話」がある。『通俗伊蘇普物語』巻之一第二十八により、その内容を示しておくことにする。

蟹母蟹兒<sup>はかにこかに</sup>に向ひ。「何故<sup>なぜ</sup>此子はそんなに横斜<sup>よこしま</sup>なあるき様をするぞ」と云ば。こかに「阿母<sup>おつかさん</sup>汝<sup>あなた</sup>の歩行<sup>あるき</sup>なさり様を御見<sup>お</sup>みせなさい。私はあなたの真直<sup>まっすぐ</sup>なおあるきなさり様を見習ひませう

○指図せんよりまづ手本を見せよ。己<sup>おのれた</sup>正<sup>ただし</sup>からざれば人を正ふすることあたはずと云ずや。

- (12) 署名は第八回までではなく、第九回以降、英語青年の発行人である喜安璣太郎の署名がある。

- (13) 国会図書館蔵の初版による。「明治二十年七月廿八日版權免許」「明治廿一年三月十日印刷」で、「同年三月? 日出版」(日は判読不能)を訂正して「四月四日出版」とした奥付がある。

- (14) 富文堂刊の大正十三年十月十三日十四版による。

- (15) 拙稿「仏教と耶蘇教の區別」(『或問』第四号 二〇〇二・六・三〇) 参看。

付記 本稿は、平成十六年度大阪市立大学国語国文学会における講演の一部を改題、改稿したものである。